

セピアの館
木村隆之

夏目漱石「草枕」異聞



木村隆之（きむら・たかゆき）

1933年熊本市生まれ、37年間、県内小中学校の教職員勤務を経て、市内の小学校長で定年退職。現在、夏目漱石記念館館長。同人誌『詩と眞実』に参加、きだたかしのペンネームで作品を発表。1972年「静かな学校」で第1回詩と眞実賞、1974年「黎明の河口」で第5回九州沖縄文学賞受賞（『文学界』に掲載）。1991年小説集『黎明の河口』で第33回熊日文学賞受賞。1994年新風舎の第2回出版作品公募に本作で当選。主な作品に「壁の向こうで」「リヴェンジ」「窓際のインベーダーゲーム」「里親ごっこ」など。

夏目漱石「草枕」異聞 セピアの館

1995年 8月1日初版第1刷

定価1030円（本体価格1000円）

著 者-----木村隆之

発行者-----松崎義行（表紙・本文カラー写真撮影）

発行所-----新風舎

〒185 東京都国分寺市本町2-2-14 クオークビル 4階

電 話 0423-22-8207

振 替 00100-4-577938

印刷所-----CTE+佐藤写真製版所

装 幀-----新風舎デザイン室

©Takayuki Kimura, 1995 Printed in Japan.

乱・落丁本はお取替え致します

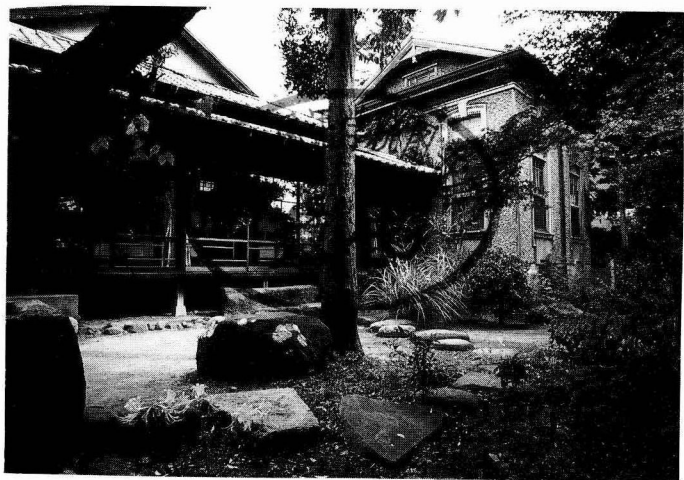
ISBN4-88306-297-X C0093 P1030E

夏目漱石
「草枕」異聞

セ。ピアの館

木村隆之

風舎



目次

夏目漱石「草枕」異聞

セピアの館

7

エヒノート年譜

熊本における漱石

153

漱石写真帖

167

夏目漱石「草枕」異聞

セピアの館

雨は白い水しふきを跳ね上げながら間断なく降り続けている。激しい雨脚に遮られ、戸外はぼおつと靄ったまま見えず、この古い家全体か、そのまま白い水の幕の中に、閉し込められてしまったかのようにあつた。

梅雨期に入り、もう五日も降り続けている雨である。テレビの天気予報は、〈今年の雨は暴力的な降り方をするおそれがあるので、警戒が必要〉と告げている。

私は所在なげに、玄関外の三和土^{たんき}に跳ね上かる雨のしふきを見つめていた。

「ほんとによう降りますね。川はたいふん増水してますけど、またまだ大丈夫のようですよ。こんな時は、お客さんも来ませんよ」

管理人が降りしゆく雨脚を見上げながら言った。彼女はこの雨の中を、こ苦労にもすふぬれになりながら、近くを流れる川の水量を確かめに行つて、帰つてきたところだった。

彼女の頭の中には、十数年前、洪水に遭った時の記憶か、いまたに生々しく焼きついているのたろう。

「この辺の土地は低くて、ちょっと雨か降るとすぐ水かあふれるんです。しかし、あの時はかりは、危うく床上まで水浸しになるところで、もう観念してました。畳を剥いで重ねて、その上で水を待つばかりにしていたんですよ」

もう何回聞かされたことたろう。彼女の話は、それから延々と、玄関の戸を押し開けるようにして、水かとつと入ってきた話、逃げ場がなく、畳を積み上げてその一番高い所に母親と二人で座り、震えあかっていた話などへと続いていくのである。

私はそれらの話を、適当に相槌を打ちながら、半はうわの空で聞き流していた。

落ち葉で樋かつまっててもいるのたろうか。屋根に降った雨は、一度でははけきれず、音を立てて激しく樋からあふれ出てくる。百二十年も経っているというこの古い家のことである。雨漏りの心配はないのたろうか。

「雨漏りは大丈夫でしょうな」

「ええ、今のところは。ここか漏るので、この間修理してもらったんです。もう大丈夫です」

管理人は、玄関わきの天井を見上げながら言った。

私か三十七年に及ぶ教員生活を定年で終えて再就職した所は、九十八年前、東京からこの地にやって来た文豪、夏目漱石か一時期住んでいた家で、今は市の記念館になって無料で一般に公開している。私はその記念館の館長というわけであつた。

もつとも館長といっても、住込の管理人だけで、他に人かいるわけではなかつた。もともと代々定年上かりの校長か、年金の課税対象外のわずかな報酬で、定年後の閑職として何年かを勤めるのか慣習になつてゐるらしく、三月で辞めた前の館長も、元小学校長であつた。

開館時間即勤務時間になつていて、午前九時半から午後の四時半までと決められてゐる。設置者である市教育委員会も、定年後の閑職で朝もゆっくり遅めに出勤して、ただここに据わつてもらえさえすればよいという程度にしか考えていないのかもしれないなかつた。

それはともかくとして、私は人間関係に伴う煩わしさが全くないというのか氣に入つてゐた。小さな小学校ではあつたか、この三月まで、校長として職員との人間関係に悩んできた私にとって、ここに勤務するようになってからの二か月近くは、まるで夢みた

いな毎日の連続であつた。

時には二、三か月前、真剣に悩んだことなどを思い出し、自分はいつたい何のために悩んだのたろうかと思うことがある。自分かとうでもよい、つまらないことにくよくよと悩んでいた気かしてならないのである。あの時に、もう少し今ののように心に余裕があったなら、悩まなくてすんだたろうに。そして、その結果うまくいったのにと当時を思い出しながら考えたりするのである。

私は自分を選んでくれた設置者の市の教育委員会に感謝しなければならないのかもしれない。なかった。

仕事も団体客が来ない限り普段は暇で、館長室に引きこもって、文豪に関する本を読んだり、趣味の小説を書いたり、たまにはほんやりとテレビを見ていたりというのか、毎日の日課であつた。

私はここにいる間に夏目漱石の全作品を読み、小説をできるだけたくさん書こうという、漠然とした計画を自分に課していた。自分の仕事に専念するのには、ここは格好の場所かもしれない。

「来館者の要請があれば、説明をする」

記念館の管理者である市の教育委員会と取り交わした契約文書の中には、そのような一項が入っていたか、大方の来館者は、まず玄関先の来館者名簿に自分の名前を記入して、展示室においてある写真やほとんどかコピーの資料に目を通し、漱石がかつて住んでいた古い家や庭などを見て、感嘆の声を漏らし帰っていくのである。

それでも私はなるべく来館者には説明してやるように心かけていた。そうでもしなければ、毎日か退屈てしかたかないのである。

吉田という管理人は、七十を過ぎた独身の女性で、母親と一緒に住んでいる。母親というのはいくらも相当な年齢で、曲かった腰を伸ばしなから、時々ひよろひよると奥の部屋から展示室や、表の十畳の間に歩み出してくる。すると、管理人はすかさず大きな声をあげる。

「お母さん、奥に入つてらっしゃいませ」

それは命令調の強い言葉ながらも、とことなく優雅で育ちのよさを感じさせる口調であった。それもそのはずで、彼女は先祖か藩公に仕えて武勲のあったという、県下でも有数な名門の家柄の娘ということ、家に証拠の系図があるというのか自慢だった。

「母は耳か遠いんです。困ったもので、あんな具合で、ひよこひよこことこへても行く

んですよ。歩きたいらしいんですか、外に出られたら危なつかしくて」

「お元氣でいいじゃないですか。おいくつになれますか」

「もう九十五なんです。百まではかんはりなさいと言ってるんですけど……」

管理人はひよろりと出てきた母親をたしなめ、奥の部屋に押し戻すように追い払いながら言った。管理人の言う通り、母親はかなり耳か遠いようだった。

私か九十五というその年齢にひっくりしていると、

「母は、漱石さんかこの家に來られた年に生まれたんですよ」

管理人は漱石の名前を、親しげにさん付けて呼ふと、次のように話してくれた。

九十八年前、旧制高校の教授としてこの地にやってきた漱石か、この旧居へ移り住んだのは、明治三十一年七月、今から九十五年前で、奇しくも、管理人の母親の生まれた年と一致するというのである。さらに、管理人の父親が亡くなったのか、漱石の亡くなった日と同じ日たというのである。

「その吉田さんか、漱石が住んだこの家におられるなんて、何かの因縁ですね」

私か偶然の一致に驚いて言う、管理人は笑いなから得意そうに話したのだった。

「うちは毎年、十二月九日か父の祥月命日です、お供えを上げ供養をするんです。

いつたったか、参観の方にそれを漱石さんの命日に供養したのと間違えられて、こ
奇特なことをなさいますねと言われましてね」

漱石は大正五年十二月九日、五十歳に満たない若さで亡くなっているのである。

明治二十九年四月十三日、夏目金之助こと夏目漱石は、前任地の松山中学校から月給
百円の破格の給料で、熊本の第五高等学校教授としてやってきた。月給十五円の小学校
長もいた時代のことである。

そして、同年六月十日、前年の松山中学校在任中に見合いして婚約した、東京の貴族
院書記官長中根重一しげかずの長女「鏡」と、最初に住んだ「光琳寺の家」で結婚している。

鏡子夫人の『漱石の思い出』によると、東京から鏡子と父の中根重一、年取った女中
さん、漱石側から婆やと車夫の総勢六人だけの結婚式であった。女中さんや婆やと車夫
か台所て働いたり、客になったりしたらしい。そのうちに三三九度になったか、三ツ組
の盃の一つか足りない。しかし、新郎はいつこう平気でまじめくさって盃を受けた。

その日はたてさえ蒸し暑い熊本の気候の上に、特に暑い日で、夫人の父親は「暑く
てたまらない」と言って障子を取りはすして、それでも暑いので上着を脱いでしまう。
新郎も着ていた冬のプロック・コートを私服に着替えて出てくるという始末であった。